

中国出張報告

宮原 佳昭

出張先：中国

期間：2012年8月14日～8月27日

私はアジア・太平洋研究センターの研究支援を受け、2012年8月14日から27日までの間、中国へ出張した。前半（8月14日～22日）は上海市近郊の農村でフィールドワークに参加し、後半（23日～27日）は広州市へ移動して中山大学図書館を訪れた。以下、前後半に分けて述べたい。

前半は、太田出（広島大学准教授）・佐藤仁史（一橋大学准教授）両氏の主催になる、上海近郊の農村におけるフィールドワークに同行したもので、前回（2011年12月）に引き続き、計4回目の参加となる。前回までの調査が、すでに太田・佐藤両氏が長年実施してきた聞き取り調査の内容を補充するものであったのに対し、今回はテーマや地点を新たに設定し、一から開始するものである。今回のテーマは、中華人民共和国建国後における国家と農村のあり方を、風土病と医療という切り口から探ることである。

今回、インフォーマントを探すにあたっては、フィールドに選定した農村に直接赴き、現地の人々にたずねながら芋づる式に見つけていく方法をとった。一行が探したインフォーマントは、1950年代から1970年代に村の幹部（党支部書記・生産大隊長）や医者（いわゆる「裸足の医者」）を務めた人物である。聞き取りを行った人数は9人、回数はこのべ13回にわたった。いずれも初回の聞き取りであるため、インフォーマントの姓名・生年月日・出身など、基本的な経歴に関する確認が中心であった。8月18日までは太田・佐藤両氏がメインの聞き役となったが、19日以降は私自身もメインとして、太田・佐藤両氏のサポートを得ながら聞き取りを実施した。インフォーマントの多くは健康で記憶力が比較的高く、話の内容も豊富であった（ただ、上記のとおり彼らの個人情報に関するものであるため、ここでは紹介を避けたい）。2013年以降も文献史料の収集・分析とともに、聞き取りを継続して実施する予定である。



上海近郊の農村

後半は、広州市に移動した。主な目的は、中山大学図書館の中国近代史関係史料の所蔵状況を調査するとともに、次回以降の利用に備え、利用方法を確認することである。広州滞在期間中は宮内肇（大阪大学学振PD）氏の協力を得て同館に訪問し、館員の案内により同館の史料所蔵状況の概要を確認することができた。利用方法についてはパスポートのみで入館・閲覧が可能で、申込書に記入すればデジカメによる写真撮影も自由と、非常に開放的なのが印象的であった。古籍部については管理がより厳重であり、事前申請が必要であるが、これは史料の盗難が近年相次いでいることも影響しているという。このように、広州滞在期間中に上記の目的を達成したほか、報告者と同様の研究分野に取り組んでいる中山大学PDの朱貞氏ら中国の若手研究者と面会し、学術上の交流を深めることができた。



中山大学図書館